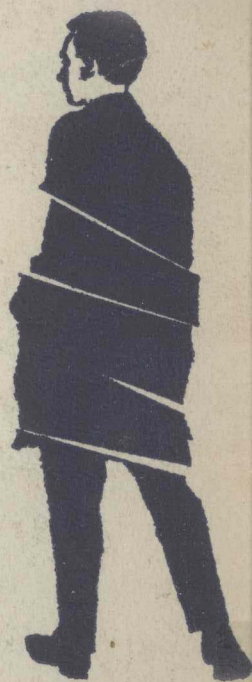


巷に黒い風が吹く

菊村 到



菊村 到
巷に黒い風が吹く



巷に黒い風が吹く

検印廃止

定価三八〇円

万一落丁乱丁がありま
したらお申し出下さい

著者ゝ 菊村 到

発行者ゝ 直良三樹子

発行ゝ 昭和四十二年二月十日 第一刷

発行所ゝ 株式会社 海燕社
ゝ 東京都港区芝罘平町二番地（小倉ビル）

ゝ 電話 東京（五〇一）九八一二番
ゝ 振替 東京 西九七番

印刷所ゝ 静和堂竹内印刷株式会社



巷に黒い風が吹く

目次



巷～に～黒～い～風～が～吹～く

～目次

第一話 1 狙われた男

第二話 22 妻の秘密

第三話 43 ある男の破滅

第四話 65 誘拐旅行

第五話 86 それを知った時

第六話 109 お菓子と拳銃

第七話 132 不幸の種子

第八話 154 いやな野郎

目次～

巷～に～黒～い～風～が～吹～く

第九話 176 176 ～ スピード作戦

第十話 199 199 ～ ある知能犯

第十一話 221 221 ～ 虎將軍の告白

第十二話 242 242 ～ 蜜と毒

第十三話 264 264 ～ 海を渡って来た娘

第十四話 287 287 ～ 生む女

最終話 310 310 ～ 刺青部長の置き土産

・ ・ ・



第一話

狙われた男

こまかな雨が夜の舗道をしっとりと濡らしていた。雨はほとんど音を立てず、息を殺して、忍び足で空から駆け降りてくるとでもいうふうに、やさしく街に降りそそいでいた。今年ももうあと残り少ないというのに、その雨には、冬の冷たさのかわりに、春さきのような甘いやわらかさが感じられた。

そんな雨の中を矢笠俊平はトレンチコートの襟を立てて濡れながらゆっくり歩いていった。彼は雨の中を傘もささずにそんなふうにして歩くのが好きだ。雨が、油気のない彼の髪の毛やトレンチコートの肩に、ささやくように、あるいは愛撫するように降りそそぎ、きらきら光る水玉をいくつも、そこに置いて行く。

もうほとんど午前二時近くになっていた。街はすっかり深い眠りの底に沈んでいたが、ヘッ

ドライトを光らせたタクシーだけが、いやにぼちり目をさましている感じで、かなりの速度ではげしく往きかわっていた。

矢笠俊平は四谷に住んでいる。ひとり身の気ままなアパート暮らしである。

職業をひとから訊かれた場合、あるときには無職と答えるし、また別のあるときには詩人と答えたり、雑文業と称したり、私立探偵といたりする。

税務署に対しては、著述業ということになっている。彼は、かつては、新聞記者をしていたが、からだを拘束されることのわずらわしさや人間関係のうっとうしさにやりきれなくなって、そこを飛び出してしまった。

自由業が一番、彼の性に合っているようだ。四谷の高級アパートの一室を借りて、そこを事務所兼住居にしている。

私立探偵ということになってはいるが、あまり繁盛はしていない。私立探偵という看板があるほうが雑文を売りこむのに都合がいい、という計算もあるのかもしれない。

私立探偵という仕事に興味的なものを感じている点も、たしかにある。彼は人間とか人生といったふうなものの裏側に興味を持っている。彼の一番好きな句いは、人間臭さなのだ。

私立探偵という仕事は、一般には、依頼にもとづいてなにかを調査し、それ相応の報酬を受けるという建前になっているが、矢笠俊平の場合は、たとえ依頼がなくても自分が興味をそそ

られれば、自腹を切って、事件の中に飛び込んで行く。もっとも、そうやって集めた材料で、ニュース・ストーリーを書いて、月刊誌や週刊誌に売りこんだり、知り合いの小説家にネタを提供してなにがしかのお礼をもらったりするのだから、決してペイしないわけではない。

事務所といっても、助手もいなければ、秘書もない。そういう雇い人は、置いておけば便利には違いないが、正直なところ、彼の収入では給料を払うのは痛いし、それにひとりのほうがなにかにつけて気が楽だというのが、人を雇わぬ理由である。

そのかわり、昔新聞記者をしていたころの同僚や知り合いの週刊誌の記者といった連中の知恵や力を、随時、借用することになっている。その方がはるかに安あがりだし、また能率的でもあるからだ。

彼は深夜、原稿を書いているとき、仕事に倦むと気分転換にふらっと外出する。そのへんをぶらぶら散歩したり、空腹をおぼえると、六本木あたりまで車を飛ばして、深夜営業のレストランに飛び込む。

ひとり身の自由業なので、そのへんは勝手気ままにふるまえるのである。

その夜は、ある月刊誌から頼まれていたルポルタージュの仕事が一段落ついたので、ほっとして小雨の降る深夜の街へぶらっとさまよい出たのであった。

目下のところ、私立探偵業より文筆業のほうがいそがしかった。私立探偵業のほうはこのと

ころ、あまり事件の依頼者も現われず、彼の食指を動かすに足る事件も起こらなかった。

さて、彼が小雨に濡れながら、こつこつと靴音を鳴らして歩いていると、うしろから走ってきた車が彼を十メートルほど追い越したところでいきなりぎぎっと急停車した。タクシーであつた。

その停車の仕方に異様なものを感じて、彼は職業柄ほとんど反射的にその車に視線を向け、二、三步そっちのほうに歩み寄つた。

ドアが半びらきになっていた。それは車がとまる前にすでにそうなっていたようであつた。とまるのとほとんど同時にその半びらきになったドアはさらに内側から強く押しあけられて、はじき出されるようにして真ッ赤なものがこぼれ出た。

矢笠俊平はおもわずはっと息をのんだ。女であつた。真ッ赤なレインコートを着ている女が車からころがり出たのだ。

女は濡れた舗道に倒れて、それからすぐはじかれたように立ちあがり、驚いたことに矢笠をめぐめて突進してきた。

身をひるがえすひまもなく立ちつくす矢笠の胸に女は体をぶつけてくると、

「助けて」

と小さく叫んだ。

矢笠は女の体をさっとわきに抱えこむようにして身構え、車のほうをにらんだ。

しかし、車はドアをしめるとそのまま走り去ってしまった。

「どうしたんです？」

矢笠は女の顔をのぞきこんだ。

女はレインコートの上からもその隆起がはっきりと分かるゆたかな胸を上げしく波打たせ、大きな眼で矢笠を見あげた。

その眼に熱っぽいものがひかっていた。どきりとさせるような美しさを女は持っていた。なかばひらかれた肉感的なふくらみを持った小さな唇のあいだからも熱い息がはげしく吐き出されていて、それは矢笠の胸をなやましく、しめつけて来た。

「すみません」

女の唇のあいだからそれだけの言葉がこぼれ出た。

「落ち着きなさい」

矢笠は、すばやく上着のポケットから煙草をとりだすと女の口にくわえさせ、ライターを鳴らして火をつけた。

女は大きくけむりを吸いこみ、それから深く吐き出した。矢笠が女に煙草をあたえたのは、彼女が水商売の女に間違いないとおもわれたからである。

水商売の女だったら煙草くらはまず吸うだろうという判断からそうしたのだ。

この矢笠のやりくちは女に安心感をもたらしたようだった。女はきゆうに自分を取りもどしたように恥ずかしそうに笑い、

「車の中でくどかれたんです。すごくしつこいの」

それで走っている車のドアをあけて叫んだら、運転手が車をとめたというのであった。

「それだけのことで、ずいぶん大げさだな。ぼくはまた殺されでもするのかとおもった」
歩きながら矢笠はいった。

「殺されるかもしれないという気がしたの」

女はまんざら誇張でもなさそうな調子でいった。

「なにかわけがあるの？」

「わけて、べつに——」

そのとき、矢笠の胸を強い職業意識が揺さぶった。

「ぼくはこういう人間です。もしかしたらあなたのために力になってあげられるかもしれない」
い」

矢笠は名刺を取り出した。女はしばらくじっと名刺に見入っていたが、顔を起こしたとき、その眼の奥に矢笠に対する信頼感めいたものが射しこんでいるのを矢笠は見のがさなかった。

私立探偵は最初の出会いの一分間で依頼者の心を惹きつけてしまわなければならない。矢笠はこの女に対してそれに成功したといってよかった。

「私の話、聞いていただけますか」

そう女がいったとき、矢笠はおだやかな微笑を浮かべていた。

「どうぞ」

矢笠は女をどこへつれて行こうかと考えた。自分のアパートへつれて行けば一番簡単なのが、相手は初対面の若い女性であり、しかも深夜と来ている。相手に警戒心をあたえることになつてはまずいとおもひ、

「六本木におそくまでやっているバーがあります。そこでお話をうかがうことにしましょう」といい、タクシーを拾つて六本木の「ケイ」という小さなバーへ行つた。

マダムのケイ子は、

「あら、矢笠先生、しばらく」

と愛想笑いで迎えた。

このケイ子の矢笠先生と呼んだ言葉が、女の矢笠に対する信頼感をさらに深めたようであつた。

つまり、矢笠の出した名刺がインチキではないということをマダムが証明してくれたわけ

ある。

矢笠は一番隅のボックスに女と向きあつて腰をおろした。矢笠はブランドーをたのみ、女に注文を聞いた。女は水割りといった。

矢笠は順序として女の住所、氏名、年齢、職業を訊き、手帳にメモした。

石崎矢尾子、二十四歳、銀座の酒場「ルーフ」のホステスで四谷三丁目のアパートに住んでいる。

「さっき、車の中で私をくどいた人はお店に二、三回来たことのあるお客さんなんですが、どうも怪しいふしがあるんです」

「あやしいふし？」

「私のある秘密をつかんでいるという気がするんです。その秘密のために私は殺されるかもしれないんです」

石崎矢尾子は声を落としていった。

作り話をしているのではなさそうだった。

「その秘密というのをおきかせ願えませんか」

矢尾子はちょっとためらっていたが、矢笠が職業上知り得た秘密は絶対他に洩らすようなこととはしないから安心しなさいというと、彼女は決心したように話しはじめた。

それによると、彼女には恋人がいるというのだ。

その恋人は陣場光男という名前なのだが、これは便宜上の日本名で、実際は陳光慶という台湾人だというのである。

陳光慶は二十五歳で、現在大手町の京安公司という貿易会社につとめている。

そしてこの陳光慶は、台湾独立運動の地下運動員だというのである。矢尾子の話によれば、台湾には現在の蔣介石の国民政府に不満を持ち、蔣介石の支配下を脱して台湾を独立させようという運動が秘密裡にすすめられていて、その同志が何人か日本にも潜入しているという話である。

陳光慶もそのうちの一人なのだが、独立運動の闘士の不穏な動きを察知して、台湾からもひそかに国民政府側のスパイが日本に送りこまれていて、独立派の連中の形勢をさぐっているという。

「はつきりいうと、台湾から殺し屋がはいってきているんです。その殺し屋に陳たちは狙われているんです。さっきのお客もその殺し屋の一味と、もしかしたらつながりがあるかもしれないです」

矢笠も台湾でそういう政治運動がおこなわれているらしいことは多少聞いていないでもなかったが、矢尾子の話にはどこか非現実的な感じがしなくもなかった。

しかし矢尾子が初対面の矢笠に対して作り話をしなければならぬ理由はどこにも見あたらなかったし、彼女の表情や声を見たり聞いたりしていると、作り話とはとてもおもわれぬのだ。矢尾子のたのみというのは、陳光慶をそういう殺し屋の手から守ってもらえないだろうかということであった。

矢笠は陳光慶の住所やつとめさきの京安公司の電話番号や所在地をきいた。

「愛してるんですね」

矢笠が訊くと、矢尾子はうなずき、恥ずかしそうに眼を伏せた。水商売の女にしては珍しい、ういういしさがそこにはあった。

「結婚はしないのですか」

「したいんですが、いま申しあげたような事情でできないんです。でも私はそれでもいいんです。私にはむずかしい政治のことは分かりませんが、生命の危険をおかしてまでも、そういう運動をやっている陳の情熱に、私すごく惹かれるんです。男の人の魅力ってそういうところにあるのではないのでしょうか」

矢笠はなるほどとおもった。矢笠には台湾の独立運動などといっても現実感が稀薄であまりびんと来ないが、酒場ではたらいたりしていると、矢尾子のような女には、かえってそういうことがひどく現実的で堅固なもののように見えてくるのかもしれないという気がしてきた。

矢尾子は問題が問題だけにやたらに人に相談するわけにもいかず、警察にたのむこともできず、本当に弱っていたところだといった。

矢尾子の語調には矢笠俊平に出会ったことを心底よろこんでいる様子が感じられ、それは矢笠を感動させずにはおかなかった。

矢笠俊平はさっそく、翌日からその仕事にとりかかった。陣場光男こと陳光慶の身辺をそれとなく調べてみたが、たしかに矢尾子のいうようにそういう人物が京安公司につとめ、矢尾子のいった場所に住んでいることは間違いなかった。

矢笠はいきなり陳光慶に会うことは避けて、しばらく彼を尾行してみることにした。

もし、殺し屋が彼の身辺につきまといているとすれば、矢笠の網にも当然引っかかってくるだろうとおもったからである。すると、たしかに妙な男が陳のアパートの近くをうろうろしていることを発見した。

矢笠がさりげなく、そっちへ近づいていくと、ふっと消えてしまう。しばらくして、そっちのほうへ眼を向けてみると、電信柱のかげなどに立っているといったあんばいなのだ。

もちろん顔は隠すようにしているので人相は分からない。日本人か中国人かも識別できない。矢笠もそういう怪しげな人物の影を目撃するにつれて、矢尾子の不安を現実的なものとして理解できるようになった。やはりあの女の言葉は本当なのだとおもい、そういう政治運動のすさ